アカシア探検隊

MI・2005

～東京オペラシティ侵入の巻～

甲：おい、東京オペラシティって知っとるか？

乙：聞いた事はありますが。（って、このワシが詳しく知っとる訳が無いじゃろ。）

甲：こんだぁ、そこへ行ってみようか思うんじゃ。

乙：へー、そうですか。行ってらっしゃい。

甲：バカたれ。お前も行くんじゃ。

乙：だって、音楽とか芸術とかって、ワシが一番苦手な分野なの、よー知っとるでしょうが。経費の無駄ですよ。

甲：インタビューはワシがする。お前はメモとって、まとめて記事にすりゃエエんじゃ。終ったら自腹で歌舞伎町で一杯奢っちゃるけぇ。経費の事は気にするな。

乙：ほー。自信ありげな…。音楽・芸術に詳しいとは知らんかった。ほんじゃぁ聞きますが、「ソナタ」ってなんか教えて下さいよ？

甲：お前はホンマになんも知らんのじゃのぅ。「ソナタ」っちゅうのは、韓国ドラマの「冬のソナタ」の主題歌じゃ。

乙：（聞くんじゃなかった…。）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

ということで、いよいよ母校創立百周年を迎える今年のアカシア会報インタビュー第一弾は、近畿アカシア会会長で、**43回卒の米澤啓明**（よねざわひろあき）先輩の登場です。米澤先輩は、昭和33年東京大学法学部を卒業後、日本生命に入社。入社当初から日本生命混声合唱団に所属し、指揮者として全国大会で最優秀賞を獲得された事もあります。日本生命で常務・専務を歴任された後、平成10年4月には東京オペラシティ文化財団理事長に就任されました。併せて㈶新国立劇場運営財団理事、㈶二期会オペラ振興会理事にも就任されました。現在は㈶AVCC（高度映像情報センター）の特別顧問をお勤めです。

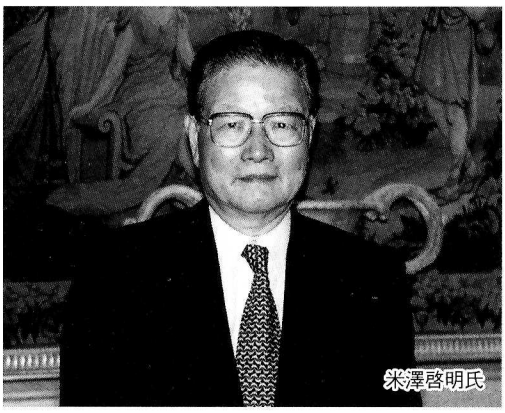
まさに文化・芸術分野の大御所というべき米澤先輩を東京オペラシティリサイタルホールに尋ね、ステージ中央にてスポットライトを浴びながらインタビューを行う予定でしたが、経費は出来るだけ百周年記念行事に振向ける上層部の方針に従い、大阪の阪急インターナショナルホテルにてお話をお伺いしました。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

甲：同期の石井泰行先輩（アカシア会会長）から伺ったのですが、ご出身は広島ではないそうですね。

米：そうなんですよ。私の出身地は横浜なんです。その僕がなんで附属に入学する事になったのか。そこには不思議なと言うか、偶然の産物と言うか、他のアカシア会員とは違う母校への思い入れを生み出すような物語があるんです。

乙：ほー是非お聞かせください。（ちょっとは声出しとかんと。）


米澤啓明氏

米：祖父が広島県双三郡川地村の出身なんです。その祖父が川崎に出てきて、鉄工所を設立したんです。中堅規模の鉄工所で堅実にやっていたようです。父は呉出身の母と結婚し私が生まれたわけですが、時期は太平洋戦争突入前夜だったわけです。国民学校、今でいう小学校に入学したのが昭和16年。まさに太平洋戦争が始まった年です。ご存知の様に戦争末期には各都市が大空襲にあいました。勿論横浜も例外ではありません。当初は箱根に疎開していましたが、昭和20年の6月に横浜大空襲があり、我家も被災してしまいました。そこで祖父の実家のある双三郡川地村に一家で疎開したんです。それが小学5年生の時でした。

甲：双三郡川地村といえば、芸備線の沿線ですね。

米：三次駅の二つほど広島よりの志和地駅が最寄の駅です。その駅も現在は無人化されていますね。のどかな山間の農村でしたが、そこに疎開した事が私と広大附属、そして友人たちとの縁の始まりだったわけです。

甲：附属を目指して頑張られた訳ですね？

米：いやいや、全然。それまで横浜にいた人間だから広大附属なんて知らないんですよ。それに戦争も終って横浜に帰ろうかなんて家族で話していたくらいですから。それが何故附属に入学することになったのか。実はほんとうにたまたま当時の担任の先生が、「米澤君、広島に広島大学の附属学校があるんだが受験してみないかね。」と言ってくれた事がきっかけなんです。随分難しかった記憶がありますが、合格できました。もし先生のその一言が無ければ、間違いなく三次市内の中学に入学し、三次高校に進学していたでしょうね。だいたい、2時間もかかるようなところへ通学するなんて誰も考えられないでしょ。何年か前に川地村に里帰りした時、ここから広島まで通学していたと言ったら皆びっくりしてましたよ。今では電化されて随分高速化されているというのにね。

横浜大空襲で焼け出されて広島県に疎開し、本当なら原爆で父を亡くすところをたまたま三次への用事があったおかげで救われ、先生の一言で附属に入学できた。さっき言ったように、他のアカシアメンバーとは違う母校への思い入れがあるというのはそういう事なんです。

甲：附属時代の思い出をお聞かせください。

米：なんと言っても今でも交流が続く友と過ごした日々が思い出されます。さっきも話したように片道2時間以上かけてノロノロ進む芸備線の蒸気機関車に乗って通学していた訳ですが、これもさほど苦痛には感じませんでしたね。と言うのも原爆で広島は全滅していたので、芸備線沿線に多くの同級生が避難していたんです。元通商産業事務次官をやっていた児玉幸治君（東京アカシア会会長）や元大蔵省印刷局長の橋本貞夫君、それから山縣洋三君、花本剛君、満井喬君、などなど優秀なメンバーが駅ごとに乗ってきて、皆でワイワイやっていました。

そしてなんと言っても、文化部で色々な事をやったことが大きな思い出であるとともに、私の人生の大きな礎になっています。

甲：そこらをもっと詳しくお願いします。

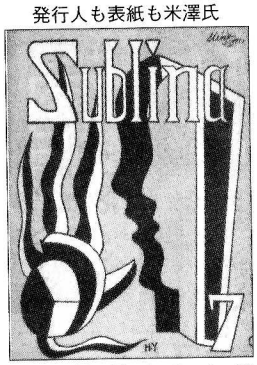
米：当時は勿論サッカーが盛んだった訳ですが、私には遠距離通学と言うものがあるから、夜遅くまで練習する事が出来ない。だからと言う訳じゃないんだが、文化部の活動には打ち込みました。高校3年生の時には文化部長として各班のまとめ役をやったんですが、個人としては、「文芸班」、「音楽班」、「映画班」の三つを掛け持ちしてやっていました。「文芸班」では、学校誌「サブリナ」を発刊しました。これは皆が書いた詩や小説を集めて発表したものですが、他校でも同様な動きがあったため、「高校文芸連盟」なる組織を結成し、各校の優秀な作品を表彰したりしました。私も詩の部門でメダルをとった事がありますし、校内ではアカシア賞を受賞しました。その時、絵画部門で後藤吟子さん（アカシア会副会長）、バレエ部門で松本なつ子さんが受賞したのを覚えています。「音楽班」では混声合唱団に入って後に朝日放送の名アナウンサーになった黒田昭夫君や児玉幸治君、サッカーでも活躍した川瀬　洋君なんかと歌っていました。九州で開かれたコンクールには広島県代表として参加しました。当時はちょうどエリザベト音楽大学を創設する動きがあって、その関係で5人くらい音楽関係の先生が在籍されていました。そのおかげで強くなれたのかもしれませんね。

「映画班」では今はどうか知りませんが、「推薦映画」というのを創設しました。これは私自身が映画を見たいものだから、堂々と見ることが出来るようにという意図が大きかったですね。それだけじゃまずいので、「映画研究」という雑誌も発刊し、文化祭などでも映画の展示コーナーを設けて、たくさんの映画の紹介をしたりしていました。

乙：随分色々活動なさったんですね。我々の頃にも「推薦映画」はありましたよ。（これくらい声出しときゃ十分じゃろ）

米：自分でも、色々よくやったなぁという思いはあるけど、先生方の理解があったればこそですよ。今でもそうだと思うけれど、本当に自由闊達で、自主自律の精神に満ちた校風でしたからね。高校時代の活動が現在に至って結実していると日々感じています。

文芸班「Sublina」
発行人も表紙も米澤氏



甲：アカシア会のメンバーに対してのメッセージをお願い致します。

米：アカシアのメンバーに対しては無いんだけど、僕はこういう思いがあります。百周年を迎えるにあたってアカシア会の運営について新たな展開を考えて欲しいんです。それは二つあります。一つは縦横の繋がりをもっと有機的にして欲しいんです。具体的に言えば次のように思うんですよ。アカシアのメンバーは各界に著名な方や、エキスパートが多くいる。つまり様々な業界に頼りになる人間がいくらでもいるわけですよ。だからもっとそれをわかりやすい形にして皆に知らしめてお互いに助け合ったり、相談しあったりできるような運営を考えて欲しいんです。

二つ目は各地域にアカシア会が出来ている。広島、東京、近畿以外にもたくさんあるわけです。それらの情報をもっと発信し、交流たらいいと思うんです。今やインターネット時代だから、情報の共有・発信は簡単に出来るはずです。各地のアカシア定例会に合わせて出張や旅行が出来たりすればいいと思うんです。

甲：現役の生徒諸君へのメッセージをお願い致します。

米：中学、高校生と言うのは学業が本分です。それは当然ですが、それ以外の事にも関心をもって積極的に取り組んで欲しいですね。私の場合も学業以外に一所懸命に取り組んだことが人生で大きな礎となり結実している。多感な時期に様々なことに取組み、自分の可能性や適性を試してもらいたいですね。附属はそれがやりやすい校風なんだからなおさらです。

もう一つは友との交流を盛んにやって欲しいですね。中学・高校時代というのは人格形成が成される時期だと思います。その時期に付き合った友人とは一生付き合えるものです。例え将来、年に一度くらいしか会えなくなったとしても心の会話が出来るもんです。勿論、大学や社会人になっても友人は出来ますが、この時期の友人は心の原風景を共有していますから、ちょっと違うと思うんです。友を作り、友を大切にして欲しいですね。

甲：今日はお忙しいところ、本当に有難うございました。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

乙：正直言ってお堅いイメージがあったんですが、とってもにこやかで、フランクな方でしたね。母校の先輩ゆうのは有り難いもんですね。

甲：記事も書き易いじゃろう。エかったのぅ。今度こそ締め切りに間に合わせーよ。それまで一杯はお預けじゃ。

乙：……。

甲斐　稔（63回）
谷口公啓（73回）

いつまでも心に残る素敵なウエディングを、ごいっしょに。

2005年2月27日（日）11:00～ ウエディングフェア開催。

お問い合わせは、広島アンデルセン5F「パーティご予約カウンター」まで。
電話 082-247-4800

ANDERSEN
HIROSHIMA

広島アンデルセン 〒730-0035 広島市中区本通7-1 電話（082）247-2403（代）